

## 東日本大震災の地へ その3

今年は、とにかく東北にこだわっている。この地に行くことが何か自分の人生を見つめるのに良いとでも思っているのか、まるで人生に課された宿題でもこなすように、東北に出かけている。

### 宮城県の気仙沼へ

9月の文化祭が終わった後の代休初日。21日には、台風15号が日本列島を縦断し東北にまで達するという、大変な一日だった。この日、宮城県の気仙沼市へ車で行く予定だった私は、朝から東北道が閉鎖されてしまい、日中テレビ等で確かめながら、その再開を待った。しかし夕方になっても天気は好転せず、出発を一日ずらすしかなかった。

翌22日朝、天気の回復を見て、夏にとった同じ経路で東北道を北上した。しかしその再開を待った車が多かったのか、道は外環道から渋滞となり、東北道に入ってようやく仙台付近を通過したのは、午後遅くになっていた。

夕刻、岩手県の一関インターを降り、市内のホームセンターで足りない装備を購入し、後は国道284号線を沿岸部の気仙沼へと進んだ。ところが市内に入った辺りで再度渋滞に巻き込まれ、東側の唐桑(からくわ)半島へ入った頃にはすっかり日が暮れていた。たどり着いたのはその高台で、海を望む景勝地「巨釜(おがま)」という場所だった。

ここには、東京・西日暮里のRQ市民災害救援センターの唐桑VCがあり、夏前から来たいと思っていた。前回の遠野行きの際には、このVCにおじゃましてすでに活動の実際を聞いていた。被災の只中にあることができるので、それも魅力だった。何よりVCが

昼の間に寝起きができるので、私には活動しやすい場所に思われた。

VCに着く前に連絡が入っていた。今夜は近所の漁師さんに呼ばれ焼肉パーティーに出かけている、とのこと。2階に上り、置いてあった地元紙の「河北新報」を読みながら、皆が帰って来るのを待った。



地図 気仙沼と東側の唐桑半島の位置

7時過ぎに戻って来たメンバーは、リーダー格がホシヤンとあだ名される星野さん。サブが落ち着いた雰囲気のある三十女のサイさん。さらにガテン系だと名乗る同じく三十女の酒井さん。そして埼玉から来たサラリーマンのシゲさんなど、多彩な顔触れだった。この日やって来たメンバーも加わって、実際の説明もそこそこに、再び酒宴となった。

### 鮪立(しびたち)の集落で

23日の朝、空はすっかり晴れ上がり、海岸から見ると海の向こうに、北の陸前高田の海岸線が間近に迫るように眺められた。美しい台風一過の晴天だ。朝食はセルフサービスだが、おにぎりのみそ汁が出た。昼のご飯もその時確保した。

出かけたのは津波の被害を受けた半島の西

側、鮪立という集落だった。港に下りる手前の交差点で、この日ボランティアに参加する団体が一堂に顔を合わせた。RQの他に日本財団、天理教団などが参加していた。まずは水際まで沈んだ岸壁添いの道路に面する、津波を被り全壊した民家の後片付けだった。廃材の多くはその重さで沖に流されなかった瓦で、これらを敷地から道路際に出して積み上げ、ゴミ出しの車が来るのを待った。どうやら一段高い隣の敷地の瓦も、ここに溜まっているらしく、いくら撤去してもまた出てくるほど大量にあった。



写真1 地盤が下がり海水が迫る鮪立の集落

この日の班長は長い夏休みの終わりに、ここ唐桑に一週間ほど滞在した大学生の加々美君だった。天気が良く暑さが戻る感じで、まめに休憩をとることに気を使っていた。

隣家の一軒とあわせ、総勢二十人位でバケツリレーならぬ瓦リレーで片付けた。気がついて見ると岸壁の端を浸していた海水がじわじわと敷地内まで入り込んでいた。この日の満潮は午後2時頃と聞いていた。このまま作業を続けるか迷うところだった。せっかく積み上げた瓦の近くまで、潮が迫って来ていた。ぎりぎりのところで午前最後のトラックがやって来て、急いで瓦などのゴミ出しを済ませた。それまで長靴での作業に面倒くさい思いをしていた私も、海水が長靴を洗うのを見て、それなりの装備は必要だと実感した。

港の入り口で、思い思いに居場所を探して昼となった。キャンプ用のクーラーと蛇口付きの水タンクを持ってきたので、飲料も手洗いも不自由がなかった。食後に先ほどの現場をのぞいて見ると、潮はいよいよ満ち、敷地もその前の道路もすっかり冠水していた。

午後はゴミ出しのトラックに乗り、瓦礫などの捨て場となっている南隣の小鯖集落の奥まで、鮪立とを往復した。野天の捨て場だったが、入り口に警備員が立ち、我々の積み荷を確認する。ところが、この老人が話している言葉が全く分からない。とても珍しい経験をした。翌日、唐桑の漁師さん大勢とあったが、アクセントは違うが、十分話は通じた。この老人の警備員は土地の人だったのだろうか。

午後の終わり近く、再び鮪立の空き家で瓦礫を広い、分別して回収する仕事に携わった。海岸から少し入った現場だが、ここでも地震後の地盤沈下で側溝には海水が侵入していた。溝に落ちないように注意しながら、作業を進めた。それがほぼ完了した頃、我々の作業も終了となった。

## 砂子浜(すなこはま)で土俵作り

24日朝、この日の作業は唐桑の外海、津波に洗われた砂子浜の漁業施設で「土俵」と呼ばれる砂袋を作る仕事に追われた。RQからの5人は私のような年配者だったが、日本財団からの10人は大学生で、その中に一緒に作業した二人は、やはり海外からの留学生だった。ブラジルとタイからの学生で、とても元気な仲間だった。

土俵と聞いて相撲の練習場でも作るのかと最初は思ったが、これは養殖漁業が盛んなこの地らしく、そのいかに吊り下げて海底に下す錘(おもり)の役だった。一袋に42kgの砂を入れて運んだ。今思えば、よくこんな重労働

働をこなしたものだと思う。土俵は、唐桑地区で1万6千必要だと言われた。そしてすでに6千が完成しているとも聞いていた。我々の支援が復興に活かされているのは、確かだった。

## 帰京前に犬小屋作り

この日は、VCに戻ってもやることがあった。日曜大工の心得があったので、ボランティアに登録する際、そのことを告げていた。リーダーのホシヤンから頼まれたのは、VCを提供してくれている食堂『海岸亭』の飼い犬サチコの犬小屋改修だった。老朽化で、屋根から雨漏りすると言われた。余っていたコンパネ(厚手のベニヤ板)を半分に切り、それを屋根に渡しねじ止めた。仕事を頼まれるというのは何より有り難い。疲れも忘れて取り組んだ。



写真2 「海岸亭」近くの景勝地、巨釜

気がついてみると、すでに多くのボランティアがVCを後に東京方面に帰り始めていた。期間を通して何かと賑やかだった川崎の富士通本社からの男女が3台の車に分乗して別れを告げると、海岸亭前の広場はすっかり静かに、寂しくなった。

随分遅くなってしまった。この日は福島県の二本松泊まりだった。明日一日を残して、今日で切り上げる予定だった。だからこそ、ぎりぎりまで仕事を任せられ快く引き受けていた。しかし、夏と違って宵闇(よいやみ)が迫るのも早か

った。明日のためのミーティングが続く2階には戻らず、そのまま車に乗って唐桑を後にした。

今回のボランティア参加は、遠野での体験と比べ、そこに参加するメンバー全員の名を覚えられるほどこじんまりとしていて、親密になることができる体験だった。ぜひまた行きたいと思う気持ちが残った……。

了